

シナリオ『狗兒爺涅槃』を読んで —東京から—

江上 幸子

北京師範大学留学中の小塩さんから、当地で好評を博した話劇『狗兒爺涅槃』の劇評が寄せられた。舞台道具を極力排しシルエットを浮き上がらせた舞台効果、諧謔味あふれるセリフ使いがとても印象的であったと、最近帰国した他の留学生も同様の感想を述べていた。顧驥『話劇舞台上的現実主義芸術力量』も、象徴主義的な手法を多用して主人公の内面心理を表現しようとの演出を、勇気あるものとたたえ、この劇の成功の一因に数えている。

生の舞台を見ることのできないわれわれは、シナリオによってその好評の原因を探るしかない。シナリオは錦雲の作。なじみは薄い作家だが、1980年短編小説コンクール五位入賞の『笨人王老大』を、王毅と共同で書いた作家といえば、思い出す人も多いだろう。人々からは「のろま」と呼ばれ、口も手も頭も村一番の無器用ものだが、実直で心根が優しく、正しいと信じたことはやり通す王老大。木こりの腕前にかけては「状元」である。副業が悪と見なされた文革の時代に、子供達が飢え凍えるのを見かねて、王老大は違法を承知で木を伐りに行き、雪山で命を落とす・・・。

この『笨人王老大』は当時、「農村における極左思想を批判した」として中国で高い評価を得た。小説自体は格別に出来の良いものとはいえないが、確かに文革直後の一つの時代の典型的な作品といえよう。劉心武『班主任』や張抗抗『夏』などと同様に、従来の「先進分子」・「利口者」が実は極左思想の体現者であり、「落後分子」・「ばか」が実は眞の肯定的人物であったというように、文革中の価値観の180度の転換をはかってみせた作品である。

しかしこれらの作品は、鮮やかな価値転換の描写で強烈な印象をわれわれに与えたものの、一方で依然として、「正面人物」は100%の「正面人物」であり「反面人物」もまたしかりという、従来の中国の小説における人物形象の造形法から抜け出るものではなかった。人間を「正面人物」と

「反面人物」とに二分するところから自由にはなりきれず、「正面人物」・「反面人物」とされがちの人間が生れる背景にまで突っ込んだ思考はみられなかった。

今回の話劇が好評を博した原因は、舞台演出や主役の演技もさることながら、主人公・狗児爺の描き方が、1980年当時の農民形象にくらべて、格段の深まりをみせていることにあるのではなかろうか。この話劇中の人物を——狗児爺のみならず、極左政策の現場の遂行者である李村長、狗児爺を捨てて李村長のもとに走る馮金花から、旧地主の祁永年に至るまで、上述の人間の二分法でとらえることは難しい。中国の評論のなかには、狗児爺を土地に執着する、小生産者意識から脱しきれない「落後分子」ととらえ、息子の大虎を、中国の新しい経済政策を実践する「先進分子」とするものもあるようだが、小塩さんも論じているように、妥当な見方とはいえない。

狗児爺はかつて地主から受けた屈辱・苦しみを忘れることなく、階級的な憎しみを抱き続ける。しかしその反面で、自分の暮しがかつての地主ほどに豊かになること、地主のような体面が保ちうるようになることに、異様なまでの執念を燃やす。彼はまた、農作業や開墾や家畜の世話に骨身を惜しまず精を出す。だが、土地や作物や家財に激しく固執し、それらを抜け目なくわがものにしてもいく。こうした狗児爺は、新社会となり土地改革の成ったあとの一時期には、「先進分子」でありえたのだが、やがて合作化の時代になると、「落後分子」とされてしまいがちである。しかし、彼の勤勉さと所有欲は切り離しがたい表裏一体のものであり、それらの原動力の一つである地主への憎悪と羨望もまた、同様のものである。ところが、単純にその一つの面を「悪」として克服することを要求されたとき、もう一つの面もまた瓦解してしまい、発狂という狗児爺の不幸がここから始まっていく。

だが、狗児爺の側もまた、極左政策の実行に直面したとき、よかれあしきれ農民の本領とされる土地への執着を貫いて、抵抗した挙句に発狂したというのではなかった。「合作化すれば電気も電話も」という李村長の言葉を信じてしまい、また、「黒い膏薬」という落伍のレッテルを張られることを恐れて、彼は土地や馬を差し出してしまう。しかも、合作化ののちに自分の土地や馬がかつてのような丹精こめた世話を受けていないのをみ

ても、改善の努力も批判もなしえず、狂っていくことしかできなかつた。

そして、文革が終り「現代化」の時代が來て、自分の土地や馬が戻り正気となつた狗児爺が、過去のことは水に流して息子とともにやり直そうとしたとき、すでに農業は「時代遅れ」となつてゐる。農民の勤勉さも土地への執着も、また地主への憎悪も羨望も持たない息子たちは、樂に「發財」できる工場を始めるといふ、狗児爺が土地改革で得た旧地主の門楼を、じゃまだとして取り壊そうとするのである。取り壊しの日の未明、狗児爺はなすすべもないままに、「とうとう俺にかなわなかつたな」と笑う地主の幻影を見ながら、門楼に火をつけて失踪してしまう・・・。

『中国文学家辞典・現代四』によれば、錦雲は1960年代半ばから1970年代半ばまで農村に暮らし、公社党委員会の副書記などを勤めながら、農村文化工作に当たつたといふ。長い間の農村での生活が、結果として最も激しく「政治に弄ばれる」ことになつてしまつた農民への同情を、錦雲の心に育てたのだろう。狗児爺の運命的な悲劇の描写に、われわれは作者のそうした深い同情を見ることが出来る。

同時に、錦雲がこの作品に織り込んだものは、単に同情のみではなく、自己批判——劉再復の言う「自己審判性反思」——の念でもある。つまり、『笨人王老大』のように、農民は純朴で正しかつたが、極左思想による指導がまちがつてゐたのであり、農民はその被害者だったというのではなく、農民もまた誤った農業政策をそれぞれに支え、あるいは少なくともそれを批判できなかつたという意味において、結局は極左思想の加担者だったのであり、文革という悲劇を経た今も少しも変わっていないのでないか、との意識が『狗児爺涅槃』にはみられる。そしてさらに、農民のこうした「弱さ・脆さ」が実は、農民の「強さ・したたかさ」としてしばしば讃えられてきたものと表裏一体の、簡単に切り離して考えることはできないものではないかという、人間ないしは人間性の二分法への作者の疑問、また、農民の「發財」にかける喜劇的な執念が、狗児爺の父の代から変わることなく息子の代へと引き継がれていく一方で、良くも悪くも農民の本領とされていたものをなくしてしまつてゐる次代への作者の懸念が、この戯曲からは感じられる。

農民形象に託した『狗児爺涅槃』のこうした自己批判は、決して単に農民にのみ向けられているのではなく、作者自身をも含む全ての人々に問ひ

かけられている、と言えるのではないだろうか。顧驥の劇評に言う「観衆の笑い声、それは苦笑いである」とは、狗児爺という形象のなかに、みずからの「被害者」の姿とともに、「加担者」の姿を見出した観衆の笑いなのではあるまい。

当代文学研究会例会活動の記録

【1984.12—1987.9】

作品合評 計15回、対象作品48編。

陸文夫…小巷深處 牌坊的故事 介紹 唐巧娣 特別法廷
小販世家 圈套 荣譽／張抗抗…夏／ 謙容…贊歌／茹志鶴
…兒女情／張潔 …愛、是不能忘記的 他有甚么病／戴厚英…高的是糸絨、矮的是芝麻／王安憶…雨、沙沙沙／鄭万隆…有人敲門 奇跡發生在那天夜里／烏熱爾圖…七岔犄角的公鹿／宋學武…干草／陳沖…小廠來了個大学生／邵振國…麥客／白雪林…藍幽幽的峽谷／金河…打魚的和釣魚的／梁曉聲…父親／陳世旭…驚濤／李國文…危樓紀事／鐵凝…六月的話題 麥積垛／蘇叔陽…生死之間／何立偉…白色鳥／張平…姐姐／張辛欣…北京人（一部）／張賢亮…男人的一半是女人／從維熙…鳳淚眼／張承志…輝煌的波馬／何力力…落日的夏威夷／三毛…搭車客／周大新…漢家女／張振剛…臭鎮悲老／周曉紅…零點以後的浪漫史／陳映真…山路／馮驥才… 阿！
船歌 感謝生活 愛之上 神鞭 三寸金蓮／郎郎…老鴻
的故事

個人研究発表……中本百合枝 「石評梅研究」

その他……………編集打ち合わせ、例会計画ほか。